

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進地域】

番号	36	都道府県市名	徳島県
----	----	--------	-----

1 推進地域における学力に関する現状

本県においては、少子・高齢化が進む中、徳島市中心部への人口流入が続き、それ以外の地域での人口の過疎化に歯止めがかからない状況にある。このため、徳島市内にある高等学校とそれ以外の地域の高等学校との間で、学力の二極化が見られるようになっている。また、各高等学校の生徒における学力差の拡大、進路希望の多様化、教員定数の減少等、学力定着に課題を抱える生徒に対する手厚い対応が難しい傾向が強まっている。

徳島県教育委員会では、平成 25 年度に本県教育の指針となる「徳島県教育振興計画（第 2 期）」を策定し、「確かな学力」を育成するために、基礎的・基本的な知識・技能の確かな習得と、習得した知識や技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成を図るとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う必要性を強調しているところである。また、そのために学力向上に関する先進的・効果的な取組とその成果をすべての園・学校に普及するとともに、家庭・地域と連携した取組を一層推進する必要性も明記している。昨年 12 月には、「とくしまの未来を切り拓く、夢あふれる『人材』の育成」を目指す「徳島教育大綱」（平成 27～30 年度）を策定し、「徳島ならではの」教育に取り組んでいる。

学力向上への具体的な取組としては、県内全ての高等学校において、「学力向上検討委員会」を設置するとともに、それぞれの実態に応じた「学力向上実行プラン」を作成・実施している。「学力向上検討委員会」は、管理職と学力向上推進員を中心とした組織体制であり、「学力向上実行プラン」の目標等を全教職員が共有し、組織的・協働的な取組ができるように協力・推進している。「学力向上実行プラン」は、向上させる「学力」の要素をより明確にするとともに、具体的な数値を設定することで P D C A サイクルを更に充実させるものとしている。

2 平成 27 年度の重点課題

県北西部に位置する県立板野高等学校が、平成 24 年度に「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究（高等学校）」、平成 25 年度に「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」の推進校として、「学び直し」をテーマに研究を行った。研究では基礎学力の定着を図るとともに、生徒一人一人の学習意欲を高めて、それを維持する指導方法の研究や、独自の学び直し教材『Smile』を作成するなど、一定の成果をあげたところである。

平成 26 年度からは、県西部に位置する県立穴吹高等学校、県南部に位置する県立小松島高等学校を加えた 3 校連携の推進体制を構築し、①「教員の授業力向上」、②「教員の面談力向上」、③「生徒の学習意欲の喚起と維持」を柱に、各校の実態に合わせた研究を始めた。県教育委員会は推進校の取組に対して指導・助言を中心とした支援を行うとともに、同様の課題を抱えながらもタイプの違う 3 校における調査研究での成果と課題を、県内全ての高等学校に普及することを目標とした。

3 研究の内容

①学力向上推進員研修会（第1回：6月10日，第2回：2月22日）

- ・各校で作成している「学力向上実行プラン」とそれに伴う取組についての研修会を実施した。授業改善等について協議するとともに，推進校における取組を紹介した。

②公開授業及び運営指導委員会

（小松島高校：6月24日，板野高校：6月25日実施，穴吹高校：9月9日実施）

- ・研究の中間報告を兼ね，推進校における公開授業，取組説明及び運営指導委員会を実施した。3日間で県内高等学校教員と中学校教員約130人が参加し，県内への普及に役立った。

③教育課程研究集会（7月29・30日）

- ・県内の全ての高等学校教員を対象に開催し，全体会で「学習評価について」，「学校におけるキャリア教育の推進について」，「次期学習指導要領について」等の説明，鳴門教育大学泰山先生による「考える力をどのように育てるか」と題したアクティブ・ラーニング，シンキングツール等について講演を行った。教科別部会では，学力向上に係る各教科の課題等を協議した。

④教育研究大会教科別学会（8月）

- ・県内の全ての公立高等学校教員を対象に開催し，授業力向上につながる協議等を行っている。国語学会では，小松島高等学校がアクティブ・ラーニングの取組を発表した。

⑤計画訪問（小松島高校：9月29日，板野高校：10月5日，穴吹高校：10月30日）

- ・推進校の教職員を対象に，研究・公開授業参観，協議，研究進捗状況確認等を行った。

⑥高大接続改革フォーラム（10月24日）

- ・県内高等学校・大学の関係者対象（約200名参加）に県教育委員会が取組を発表した。

⑦文部科学省大滝調査官による推進校訪問（小松島高校：11月30日，穴吹高校：12月1日）

- ・小松島高等学校における研究・公開授業，協議会を研修の一環として県内高等学校に案内した。県内高等学校教員約50人が参加し，県内高等学校への普及に役立った。

⑧高大接続情報交換会（12月8日）

- ・県内高等学校・大学の関係者対象（約100名参加）に県教育委員会が学力向上の取組を発表し，穴吹高等学校が研究成果・課題を発表した。

⑨あわ(OUR)教育発表会（12月24日）

- ・県内の幼・小・中・高・特別支援学校が一同に集い，パネルディスカッション形式で取組や研究成果の発表を行った。特に本年度は，アクティブ・ラーニングの取組，ホワイトボードの活用等の発表を行う小・中学校もあり，他校種の取組等を知る有意義な研修機会となった

⑩言語活動実践協議会（2月8日）

- ・「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「言語活動の充実に関する実践研究」の拠点校である徳島県立川島中学校・高等学校において研究の成果・課題報告を兼ね，公開授業，取組説明及び言語活動実践協議会を実施した。3日間でほとんどの県内高等学校教員と地元中学校教員約100人が参加し，中学校・高等学校の授業改善の取組に役立った。

⑪推進校等における各種研修会

- ・教育評価研修会（5月25日：穴吹高校），アクティブ・ラーニング研修会（7月8日：穴吹高校，10月16日：小松島高校），ホワイトボード・ミーティング研修会（5月15日：小松島高校，9月24日：上勝中学校）を開催した。各高等学校等にも案内して参加を募り，合同研修という形で実施し，県教育委員会指導主事等も参加して参加教員らと共に演習を行った。

⑫徳島県立総合教育センターでの研修等

- ・各教科の指導力向上講座，授業改善のための土曜セミナー等，各種研修会を実施するとともに，ホームページで学力向上関係資料等の提示を行い，各校での取組を支援している。

4 研究成果等の把握と検証

小・中学校においては、昨年2月に「徳島『確かな学力』育成プロジェクト」を策定し、「徳島県学力向上・授業改善調査検討委員会」による分析・指摘を踏まえ、「学力向上及び全国調査に対する意識を揃える」、「授業改善」、「家庭学習の充実」、「学校マネジメント力の改善」等の対応策に取り組んだ結果、平成27年度調査では、多少の改善が見られたところである。

高等学校においても、高大接続改革の進展に伴い、アクティブ・ラーニングの気運が高まり、校内外の研修等に積極的な学校、教員が増えており、学校挙げての実践も広まりつつある。その中で、各校は、成功事例のみならず失敗事例も含めた授業実践事例を求めている。本年度、推進校3校で実施した運営指導委員会は、公開授業と併せて実施したため、ほとんどの高等学校から複数名の教員参加があった。参加教員には、「所々に授業改善のヒントがあり、参考になった」と好評であった。小・中学校におけるプロジェクトと連携を図りながら、更なる授業改善等に取り組む計画である。

また、推進校3校で成果を上げているホワイトボードの活用は、県内の公立小・中・高等学校で広まりつつある。あくまでツールの一つではあるが、あえて特化することで、「学びの徳島モデル」ともいうべき、より効果的な活用方法が示せると考えている。

県内全公立高等学校対象に「生徒の意識等に関わる調査」を行い、経年（1年・2年）と追跡（前1年と現2年）比較を実施しているが、生徒の自尊意識、学習意欲等において課題がある。学ぶことの重要性に対する意識については高い値を示すが、なぜ学ぶのか等、学ぶこととキャリア形成についての関連づけの意識は希薄である。基礎的な知識・技能をしっかりと身に付けさせるとともに、知識・技能を活用し、自ら考え、判断し、表現する力を育む必要があると認識している。

※平成27年度「生徒の意識等に関わる調査」結果抜粋

◎「自分にはよいところがある」

	H27	H26	H22
1年全体	65% (定時50%)	64% (同50%)	54% (同45%)
2年全体	65% (定時52%)	62% (同52%)	55% (同47%)

○H22から増加(全体10%, 定時5%)。

※全国学力・学習状況調査(中3)

H25 : 64.9% H26 : 68.2%

●「勉強は大切だ」

	H27	H26	H22
1年全体	96% (定時85%)	96% (同82%)	92% (同87%)
2年全体	95% (定時86%)	95% (同83%)	91% (同86%)

○H22から全体4%増加, 定時はH26減少, H27回復。

●授業の中で分からないことがあったら「そのままにしておく」

	H27	H26	H22
1年全体	43%	44%	48%
2年全体	48%	50%	55%

○H22から1年5%, 2年7%減少。

※全国学力・学習状況調査(中3)

選択回答 H25 : 8.8% H26 : 9.0%

●「学習時間(平日)」全くしない

	H27	H26	H22
1年全体	12%	12%	15%
2年全体	17%	18%	20%

○H22から1・2年は3%減。

※全国学力・学習状況調査(中3)

H25 : 3.5% H26 : 3.4%

5 推進地域における研究成果等の活用

推進校における継続的な取組を支援するとともに、県内全校参加の「あわ(OUR)教育発表会」等で研究成果を発表したり、県教委主催の各種研修会等において、継続的に実践報告・広報を行う。

また、本年度、推進校等で実施した公開授業、研究協議会には、多数の教員の参加があり、絶好の普及の機会となったため、次年度は更に拡大して実施することとしている。

1 H24～25の取組概要

推進校：徳島県立板野高等学校

①基礎学力の定着, 独自教材の作成

…英語, 数学, 国語の復習授業実施。

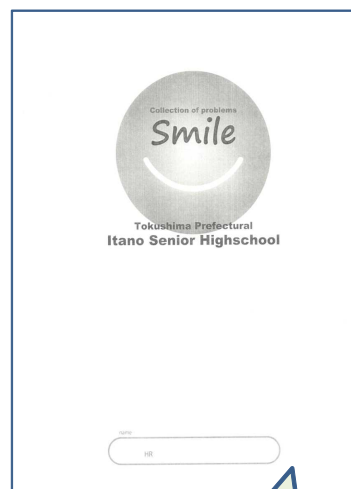
弱点分野克服のため「Smile」を作成。
(小学校・中学校段階から復習を実施し, 未習熟分野を洗い出して作成。)

②面談スキルの向上

…教育コーチング研修等を通して,
生徒の「やる気」を引き出す面談
スキルの向上を図る。

③家庭学習の習慣化

…生活記録を毎朝記録させ, 前日
の家庭学習の振り返りを実施。



【独自教材「Smile」】
他の高等学校や地元中
学校と連携し, 実際に活
用してのアンケートや意
見交換等により, 改訂を
加える。

同様の課題を抱えながらもタイプの違う
2校を加えた3校連携推進体制の構築へ

2 H26～27の取組概要

板野 ①「Smile」の成果検証と指導法改善…独自教材活用法の見直し。
高等学校 ②面談力の向上…コーチング技術活用。「やる気」を引き出す。
③能率手帳の活用…自己管理能力育成。学習習慣の定着。

穴吹 ①授業力向上と評価方法改善…授業で生徒の「出番」を増やす。
高等学校 ②中学校との連携…中学校との合同研修会・意見交流の実施。
③地域との連携…異年齢の方と関わり, 喜びの経験を増やす。

小松島 ①学力向上策の改善…松高セミナー, テスト等の改善。
高等学校 ②授業力向上と面談の充実…A L実践。面談で学習意欲向上。
③地元中学校との教育交流…教員・生徒の相互交流と広報。

★3校ともホワイトボードを活用したアクティブ・ラーニングを実践。

研究成果等の活用

「学びの徳島モデル」へ

- ①推進校での公開授業・協議会を県内中学・高等学校参加で実施する。
- ②推進校での研修会は県内中学・高等学校との合同研修会とする。
- ③県内全校参加の「あわ(OUR)教育発表会」等で研究成果等を発表する。
- ④県教育委員会主催の各種研修会等で継続的に実践報告・広報する。

(様式 7)

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協同的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（徳島県立板野高等学校）】

番号	36	都道府県市名	徳島県
----	----	--------	-----

1 学校の概要

＜生徒数・学級数(平成 27 年 4 月 1 日時点)＞

学校名	徳島県立板野高等学校（とくしまけんりつしたのこうとうがっこう）				
学 年	1 年	2 年	3 年	計	教員数
学級数	5	5	5	1 5	5 0
生徒数	1 8 0	1 7 9	1 5 4	5 1 3	
	学校のホームページアドレス		http://itano-hs.tokushima-ec.ed.jp/		

2 推進校における学力に関する現状

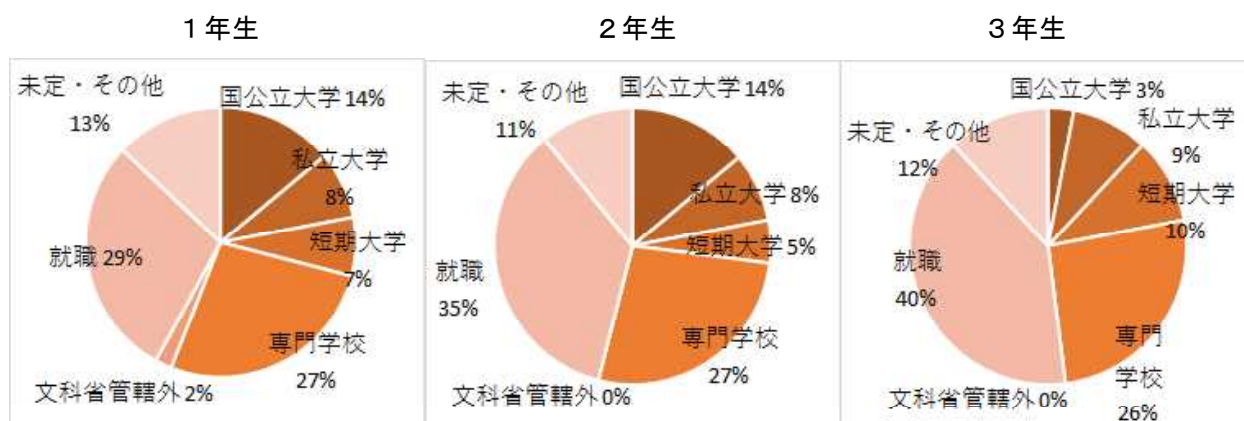
入学時点において、基礎的・基本的な学力に課題を抱える生徒が少なからず入学してくる傾向があり、高等学校での学習へ円滑に移行することが現実的に困難であると判断される生徒が各クラスの一定数を占めている。そのため、習熟度別の授業展開等の工夫で対応しているが、現実には学力の定着についての差が大きく、一斉授業での対応に困難を感じるようになってきている。

また、希望進路についても（表 1）から分かるように、国公立を含む「大学・短大」「専門学校」「就職」にほぼ 3 等分されることから、到達目標たる学力についても到達基準を設定することが難しい状況にある。

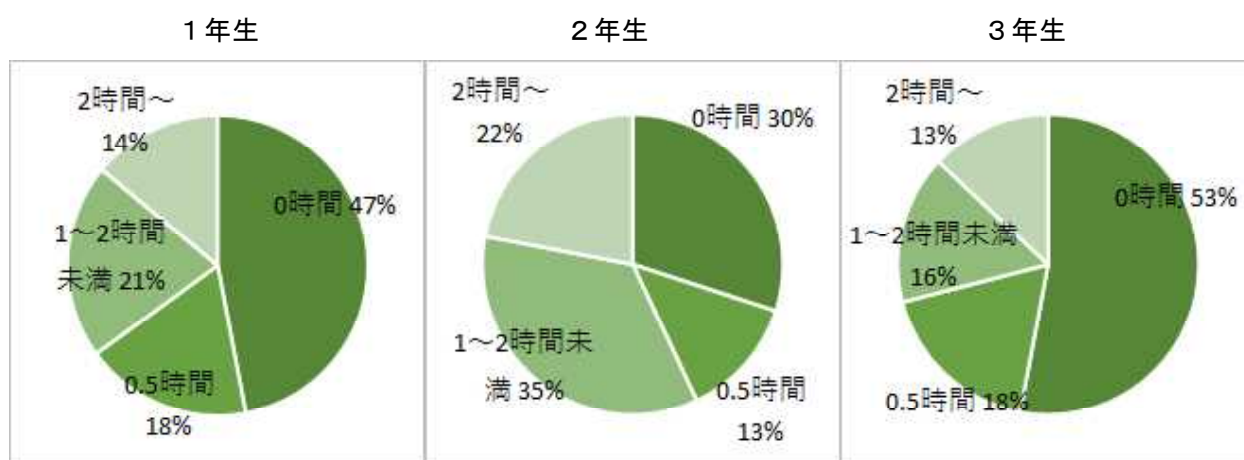
さらに、（表 2）に見られるように、本校では普段から学習習慣のついていない生徒が数多く存在するという大きな課題がある。この学習習慣を定着させるための対応としても、これまで、各定期考査前の一週間を、学習習慣をつけるための週（ステップアップウィーク）と位置づけて、毎日放課前に 30 分間の自習時間（チャレンジタイム）をとり、自習させたり教科でプリントを用意して自由にやらせたりして、家庭での学習に繋げていく工夫をするなど、学校を挙げて様々な取り組みを実施している。

しかし、これらの方策も短期的な効果は生み出すものの、なかなか長続きせず、元来の基礎学力の不足から長期的なモチベーションの維持につながりにくいという課題が浮き彫りになっており、持続的な生徒の「やる気」を引き出すための方策が求められている。

※（表 1）各学年の進路希望調査結果（平成 26 年 6 月実施）



※（表 2）家庭での学習時間（平成 26 年 12 月実施）



3 研究課題

この課題を根本的な部分から改善するには、生徒が自ら学ぶ意欲と態度を身につけ、それを 3 年間に渡って維持・増進することが求められる。このような主体的な学習意欲の喚起と維持、併せて、その成否に大きく関わってくると考えられる教員の授業力・面談力の向上を調査研究課題に設定したい。

4 平成 27 年度の重点課題

現 1 年生の入学年度当初の期間に、中学段階までに定着していない学力を補い、スムーズに高等学校レベルの学習に移行できるよう、英語・数学・国語の 3 教科について、定着していない学習分野の「学び直し」を、本校の独自教材『Smile』を用いて実施していた。『Smile』とは、英語・数学・国語の 3 教科について、定着の危ぶまれる分野のうち、高等学校での学習にスムーズに移行するために必要な範囲を抽出して、その分野を重点的に復習する目的で作成した問題集である。一昨年度は、この作成した教材を実際に利用して、どのような効果があるかを検証するとともに、内容について広く地元中学校や周辺高校から意見を聞きながら吟味をし、改訂を加えた経緯がある。基礎学力の定着に問題のある生徒が、高等学校の学習に円滑に移行できるよう、生徒の実態に応じた効

果的な指導方法を研究する。併せて学び直し教材の問題の質の妥当性や問題量の適正、講義や問題演習の中で必要な点など、様々な部分で問題点を洗い出し、教材の手直しを図る。

また本校のような課題を抱える学校の生徒には、「自分は どうせできない」といった自己肯定感の低い生徒が多く見受けられ、能力があるにもかかわらず、最初からあきらめて努力しようとし、生徒が多いことから、授業とは違う角度、すなわち「教」と「育」のバランスを取り、生徒一人一人のモチベーションを向上させ、学習に対する継続的な意欲を生徒自身から引き出すために、教育コーチングの技法を取り入れ、教員の側の面談技術の向上を図る中で、「教」の部分である生徒の基礎学力の定着を図る取り組みの実施とともに、教員自体の面談のスキルアップを図り、「育」にあたる生徒自身の内からの「やる気」を引き出すことも引き続き試みた。

家庭で殆ど学習をしない生徒の大半はしっかりとした基本的生活習慣が身についておらず、仮に一時、学習意欲が喚起されてもそれを形に出来ない、或いは継続的な学習が生活習慣の一部として定着しないおそれがあるため、生徒に計画的な生活を推奨する目的で、昨年度、現1年生と現2年生の全員に手帳を持たせた。本年度は、3学年全てで手帳の活用が出来るようになり、生徒の基本的生活習慣の見直しが、これで軌道に乗るものと期待されることから、その効能、また効果的な手帳の指導方法などについて、さらに研究を進めた。

5 研究の具体的内容

平成27年度における本校の取り組みは、大きく以下の3点に集約される。

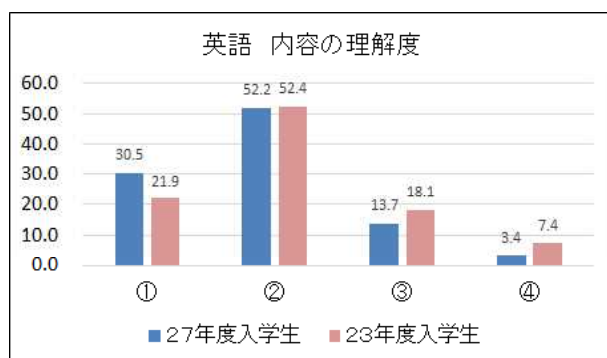
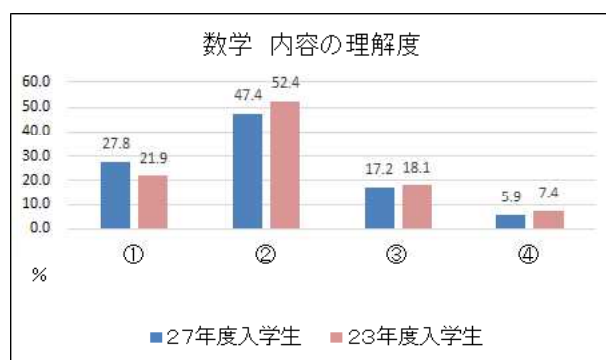
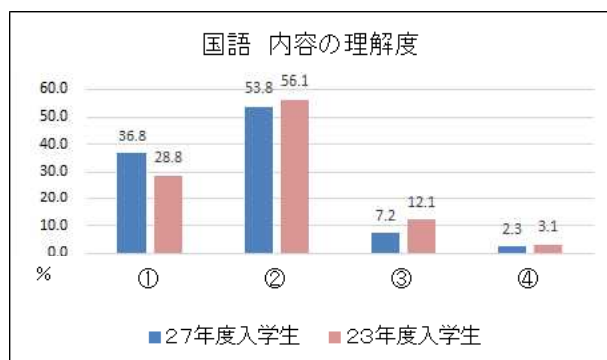
- ① 現在、1年次の4月から5月上旬にかけて「国語総合」、「数学Ⅰ」、「英語表現Ⅰ」の授業において『Smile』を活用して授業を行い、基礎学力の充実を図っている。基礎学力の定着に問題のある生徒の学習の様子や提出物の記述内容、テストの結果から、学び直しの時期、指導方法、『Smile』で取り上げた教材について、実際に授業を行った教員の意見を元に問題点を洗い出し、教材の手直しを図る。
- ② 機会を捉えて、生徒自身の内からの「やる気」を引き出すことができる面談の方法論等について、各種研修に教員が参加し研究を重ね、個々の生徒への対応に活かす。
- ③ 「手帳使用」の導入により、学校行事・課題提出日・部活動日程等を視覚化させ、自らスケジュール管理が出来るよう指導し、望ましい基本的生活習慣の定着を促す中で、自己管理能力の育成を図る。また、学年集会や各種学校行事の際にも手帳を携帯し記述させることで、社会人として必要な情報の収集能力、選択能力を育成する。また、インターンシップやボランティア活動への参加を通し、実際の社会生活全般がこのような自己管理を前提として営まれていることを実感させ、社会生活と学校生活の繋がりを理解することにより、学習意欲の向上に繋げる。

6 研究の成果

①独自の学び直し教材『Smile』の改訂、授業方法の見直し

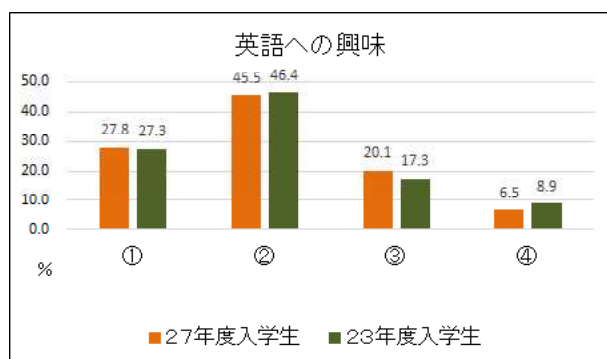
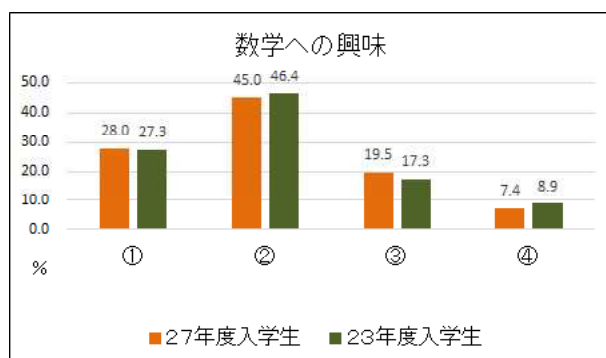
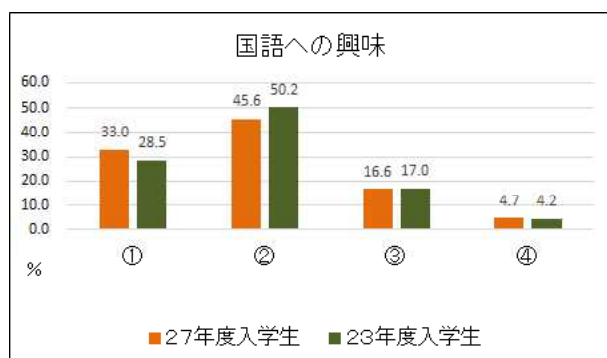
次の(表3)、(表4)は2学期末に実施した平成27年度入学生(現1年生)と「学び直し」実施前の平成23年度入学生の授業評価の結果を比較したものである。また、(表5)～(表9)は平成27年度入学生(現1年生)、平成26年度入学生(現2年生)、教員に行った「学び直しに関するアンケート」の結果である。

※（表 3）内容の理解度



- ①よく理解
- ②まあまあ理解
- ③あまり理解できていない
- ④理解できていない

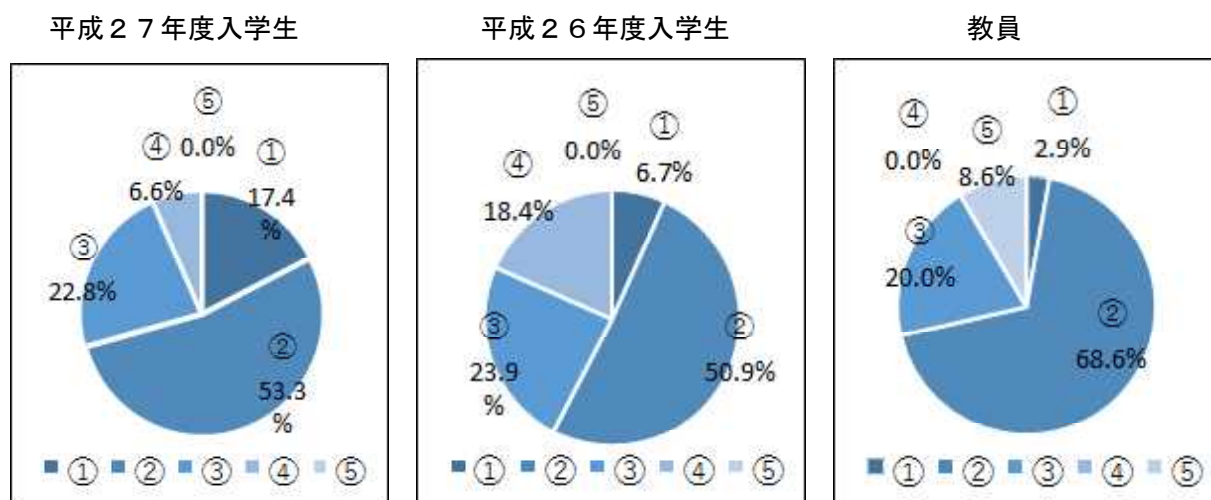
※（表 4）教科に対する興味



- ①とてもある
- ②まあまあある
- ③あまりない
- ④まったくない

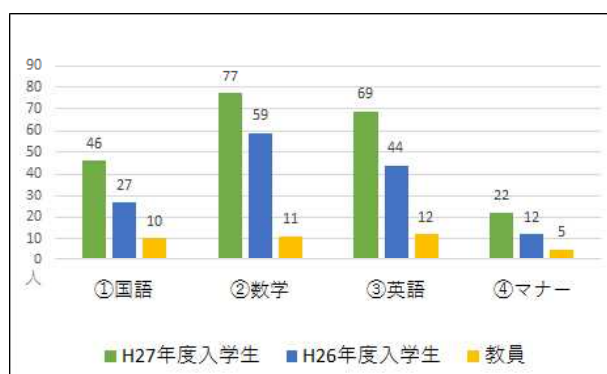
理解度は「学び直し」実施前と比較しすべての科目で現1年生の方が上回っている。しかし、興味については国語の「とてもある」を除いてはほとんど変化がない。「わかる」という実感が「知りたい」「学びたい」という意欲につながっていないことがうかがえる。

※（表５）「Smile」は効果があったか

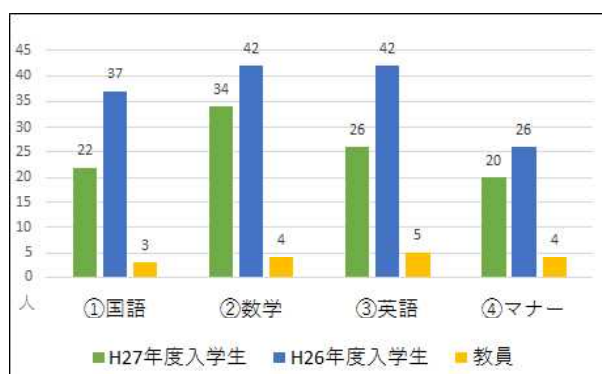


①かなりあった ②ある程度あった ③あまりなかった ④なかった ⑤無回答

※（表６）効果があった科目は何か



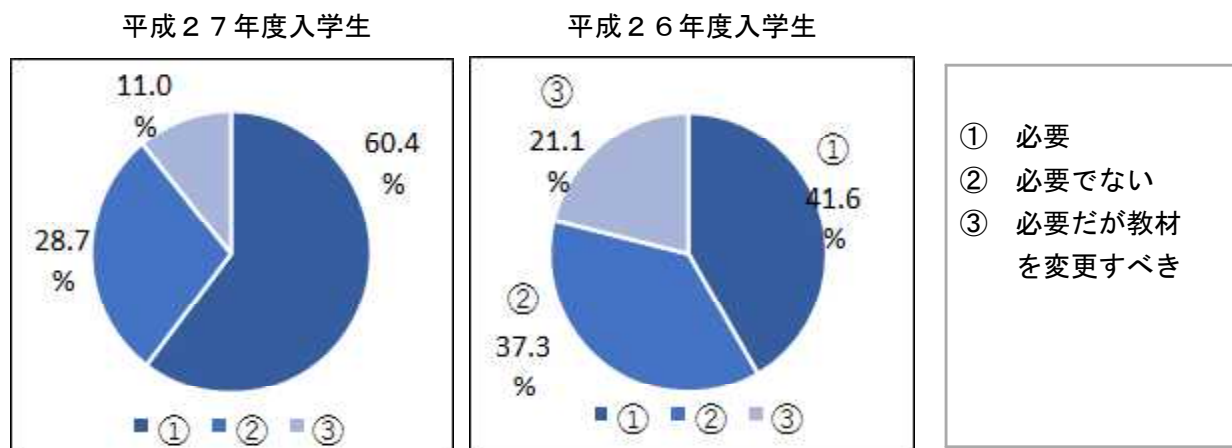
※（表７）効果がなかった科目は何か



（表５）によると、現１年生では「効果があった」とする回答が、現２年生に比べて約１３パーセント増加し７０．７パーセントに達している。教員の回答も「効果があった」とする割合が７０パーセントを超えており、『Smile』による学び直しは一定の効果があったといえる。しかし、「効果がなかった」とする回答が現１年生では約３割、現２年生では約４割に上っている。

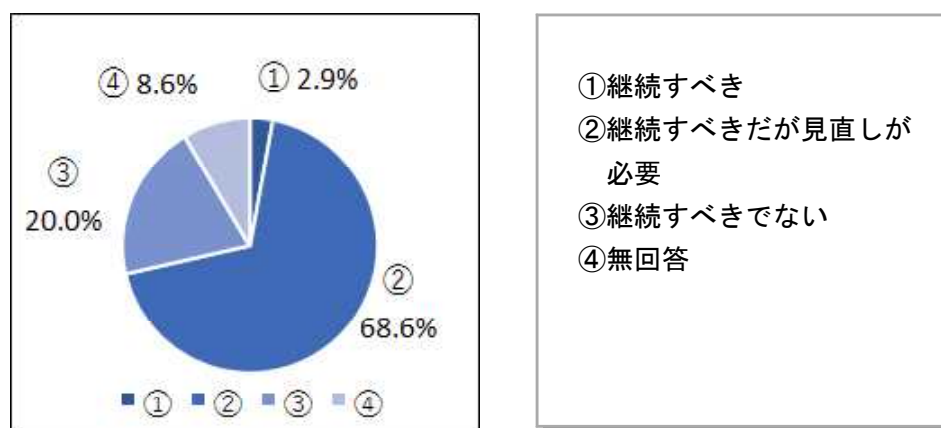
（表６）と（表７）は「効果があった科目」と「効果がなかった科目」をまとめたものである。いずれの項目でも数学、英語の値が高く、このことから本校生徒の多くが数学、英語に対して苦手意識を持っていることがわかる。改訂時「国語」「数学」「英語」の各分野の指導は科目担当教員が行い、「マナー」の指導は担任、副担任が行うことを想定していた。実際に『Smile』を用いて授業を行った教員は全体の４６パーセントであり、さらに「マナー」の授業を行ったことのある教員は２２．９パーセントにとどまった。学び直しの目的を全教員で共有することができていなかったことが原因の一つになっていると思われる。

※（表 8）「smile」を用いた学び直しは必要か （生徒のみ）



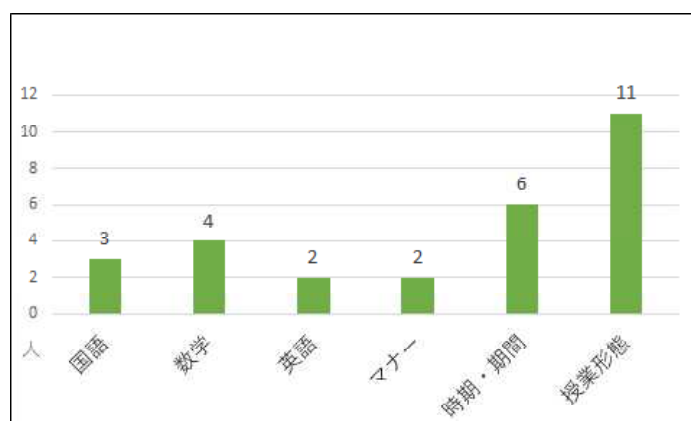
（表 8）は生徒に対して行ったアンケートの結果である。『smile』を用いた学び直しは必要かという質問に対し、「必要」と回答した生徒は現 2 年生では 4 割にとどまっていたが、現 1 年生では 6 割を超えた。その理由として「中学校で理解できなかった分野が高校に入って理解できるようになった。」「中学校までの復習になって、自信がついた。」という意見が挙げた。本校生徒の多くが、不安を抱えたまま入学している現状をふまえると、高等学校での学習に円滑に移行するという『Smile』の目標は達成している。一方で、現 2 年生では 4 割弱、現 1 年生では 3 割弱の生徒が「必要でない」と答えている。ほとんどの生徒が理由として挙げたのが「問題が簡単すぎる。」「学び直しをしても成果が出ない。」というものだった。学び直しでは少人数授業を展開しているが習熟度別にはなっておらず、基礎学力の定着を課題とする者と、ある程度基礎学力が定着した者、十分に身につける者が同じ教室で学習している。学習習慣の身につけていない生徒は長時間机に向かうことから始めねばならず、短期間で目に見える成果を出すことは難しい。また、国公立大学への進学、また医療・看護系専門学校への進学を希望する一部の生徒は、学習進度が他校と比較して遅れることを心配している。このことが学び直しに対する不満となり、「必要ない」という意見につながったと考えられる。

※（表 9－1）「smile」を用いた学び直しについて、継続すべきか。（教員のみ）



※（表 9－2）「smile」で見直しが必要なのは何か

（②「継続すべきだが見直しが必要」と回答した教員のみ）



（表 9）は教員に対して行ったアンケートの結果である。『Smile』の使用を「継続すべきだが見直しが必要」という意見が最も多く 7 割近くに上っている。「継続すべきでない」と答えた者も何らかの方法での学力向上の対策が必要だと考えており、学力向上が本校の課題であるとする認識は一致している。『Smile』による学び直しは心理的な効果はあるが、実際に学習意欲の喚起、学力の向上に繋がっていないという感想を、多くの教員が持っている。また、記述回答では、学び直し中心の学力向上対策に特化するのではなく、個々の生徒に応じた学力向上の取り組みが必要、家庭学習の課題が作業になってしまっており効果が期待できない、という主旨の回答が多かった。

4 年間継続してきた『Smile』による学び直しを、よりよい形で次につないでいかなければならない。来年度に向けて、見直しが必要という教員の意見が集まったのは授業形態、実施時期・実施期間である。「効果がなかった」と回答した生徒のうち、英数クラス（進学クラス）以外の生徒が現 1 年生では 9 割、現 2 年生では 8 割だったことも、学び直しの在り方を考えていく上で見過ごすことはできない。クラス内の学力差に配慮した授業形態や補助教材の導入について、検討が必要である。

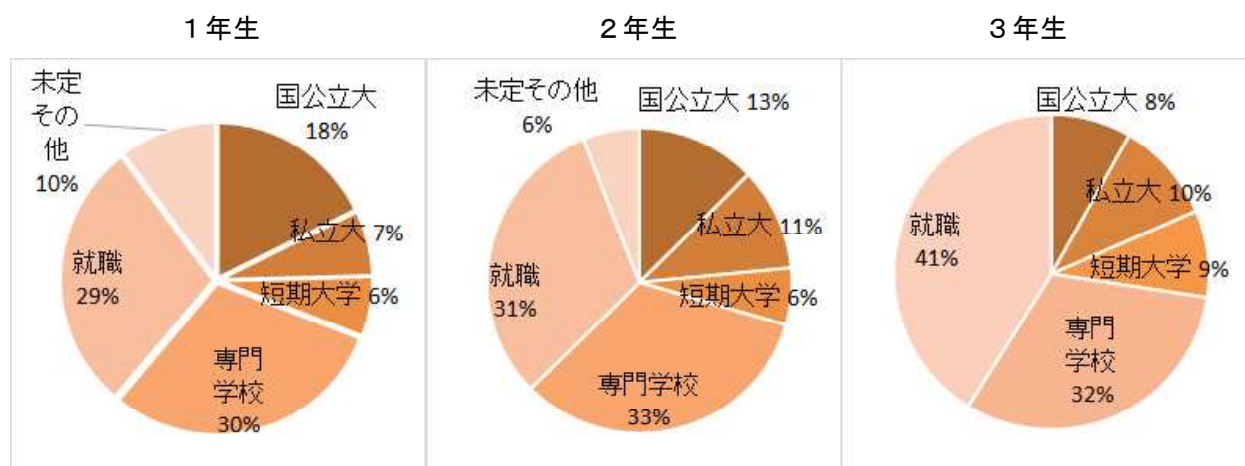
アンケート結果や担当教員の意見から、来年度は下記のように変更したい。

科目・項目	現行	変更後
実施時期 実施期間	<ul style="list-style-type: none"> ・ 入学直後 ・ 4 月上旬から 5 月上旬に実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 1 年次は入学直後、3 年次で再配布（就職生対象） ・ 4 月中に実施
英語	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態に応じて問題を精選 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態に応じて問題を精選 ・ 「英語表現 I」の授業時に必要に応じて復習
数学	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態に応じて問題を精選 	<ul style="list-style-type: none"> ・ P 3 1～3 2（小数の計算問題）を 3 年次の就職試験対策で使用、1 年次ではカット
国語	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態に応じて問題を精選 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の実態に応じて問題を精選 ・ 漢字学習帳を使用しているため、P 5 8～P 6 1（漢字の書き取り）をカット ・ P 6 2～6 5（接続詞、敬語表現）は「国語総合」の授業時に必要に応じて復習

②面談力の向上

今年度は5月21日に株式会社ベネッセコーポレーションの市場大樹氏を講師として迎え、「大学入試改革の影響、多様な進路への対応を前提とした学校の学力向上施策」という演目で、職員研修会を実施した。また、毎年4月に実施している面接旬間に加え、科目選択の予備調査前、本登録前には担任による個人面談を実施した。さらに、学年会で全生徒の選択科目について生徒の進路希望に合致した選択かどうかの確認作業を行い、生徒の適性を生かせる志望であるかどうか、進路設計がしっかりとしたものであるかどうかについても検討し、面談時に的確な指導・助言が行えるようにした。生徒一人一人の学力や家庭環境を十分に考慮した上で、具体的な進路対策を明示し、学習意欲の喚起を図った。

※（表10）各学年の進路希望調査結果（平成27年7月実施）



※（表11）家庭での学習時間（平成27年12月実施）



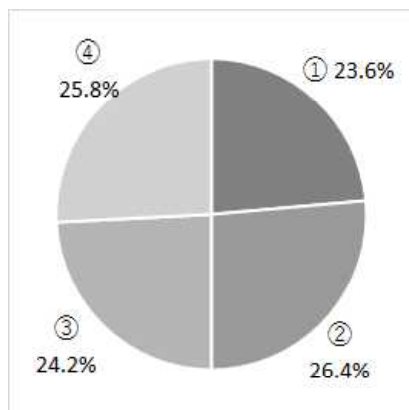
平成27年7月に実施した進路希望調査の結果（表10）と1年前に実施した希望調査とを比較してみると、「未定・その他」の割合が全学年において減少している。特に3年生では「未定・その他」の生徒は0パーセントとなっており、試験対策を早期から行うことができた。教員と生徒との面談回数を確保し一人一人の希望を教員が正しく把握したことで、きめ細やかな進路指導が可能となった。

（表11）は平成27年12月に実施した学習時間調査である。現1年生では家庭学習時間が0時間の生徒が4パーセントとなっており、他学年に比較すると家庭学習の習慣化が進んでいるといえる。現2年生においては、0時間の生徒が30パーセントを超え、少ないとはいいがたいが1年前に比較すると14パーセント減少している。

③手帳の使用

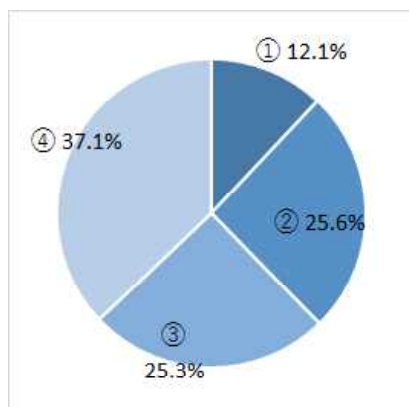
３年生では、２年次に引き続き学年集会では必ず手帳を会場に持参し、メモをとるように指導をしてきた。また、就職・進学に関するスケジュールも自らが管理するように促した。現１年生、現２年生に対しても３年次の就職試験・入学試験時に手帳を使いこなせるように、「持参しメモをとる」ことから指導を始めた。次は「手帳（スコラ）に関するアンケート」の結果である。

（表１２）忘れ物・提出遅れは減ったか



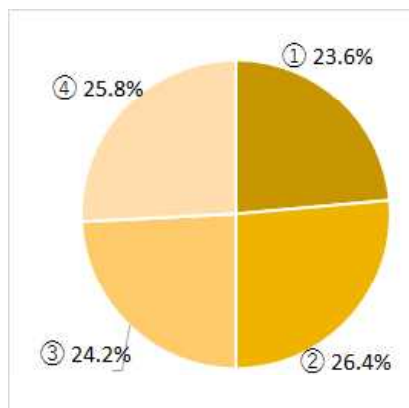
- ①かなり減った
- ②減った
- ③少し減った
- ④減らない

（表１３）時間を意識して生活するようになったか



- ①強く意識するようになった
- ②意識するようになった
- ③少し意識するようになった
- ④変わらない

（表１４）計画的な学習や生活ができるようになったか



- ①かなりできるようになった
- ②できるようになった
- ③すこしできるようになった
- ④変わらない

（表１２）～（表１４）では、改善できたあるいは自己管理できたと自己評価している生徒が多い。けれども、３割から４割弱の生徒には改善が見られない。やはり「聞いてメモをとる」には「聞く

能力」や「書く能力」、「判断力」等，総合的な学力が必要であり，手帳を効率よく使用し社会性を高めていくためにも，基礎学力の定着は必要である。



7 今後の課題

今後の課題として，「教員間の目的意識の共有」と「生徒の学習意欲の喚起」が挙げられる。

これまでの取り組みや目的を教員が共有できていなかったことがアンケート結果から明らかになった。目的は何かということを全教員が共有し分担・協力して行うことで，教員の負担感も減り，一人一人の生徒に対する細やかな指導が可能になる。入学直後の学び直しをどのように高等学校での学びに繋げていくか，学年団と国語，数学，英語担当者との連携が必要だ。

『Smile』を利用した学び直しは，学習や学校生活に対する入学後の不安を取り除き，高校生活を円滑にスタートさせるという点では一定の成果があった。しかしながら，家庭学習時間の伸びが現2年生，現3年生で低かったことから，学び直しが学習習慣の確立に十分に寄与していないことがわかる。ほとんどの生徒は「わかる」ことに満足してしまい，もっと深く知りたい，もっとできることを増やしたいという学習意欲を持てずにいる。教員がわかりやすく要点をまとめて授業を行っても，生徒自身が主体的に学習しなければ学んだ知識や技能は生きたものにならない。「生徒の学習意欲の喚起」をどう実現していくかが課題だ。一方，少数ではあるが各種資格の取得に挑戦する生徒がいる。その理由として彼らが口をそろえて唱えるのが，就職時・進学時に有利であるということだ。進路目標が具体的に定まっている生徒は，学習に意欲的に取り組んでいる。5月に実施した研修会でも早期に進路目標を立てることの重要性を再確認したが，学習意欲の喚起を図る上でもキャリア教育の充実は重要であると考える。現在，本校では1年次にインターンシップを実施しており，各学年で実施する進路ガイダンスと併せて，本校のキャリア教育の柱となっている。これらのキャリア教育と学び直しをどのように関連づけて行っていくか，学校全体で見直し，目的の共有化を図りたい。

(様式 7)

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（徳島県立穴吹高等学校）】

番号	36	都道府県市名	徳 島 県
----	----	--------	-------

1 学校の概要

＜生徒数・学級数(平成27年4月現在)＞

学校名	徳島県立穴吹高等学校（とくしまけんりつあなぶきこうとうがっこう）				
学 年	1 年	2 年	3 年	計	教員数
学級数	3	3	3	9	2 9
生徒数	8 1	8 0	7 2	2 3 3	
	学校のホームページアドレス		http : //anabuki-hs.tokushima-ec.ec.ed.jp/		

2 推進校における学力に関する現状

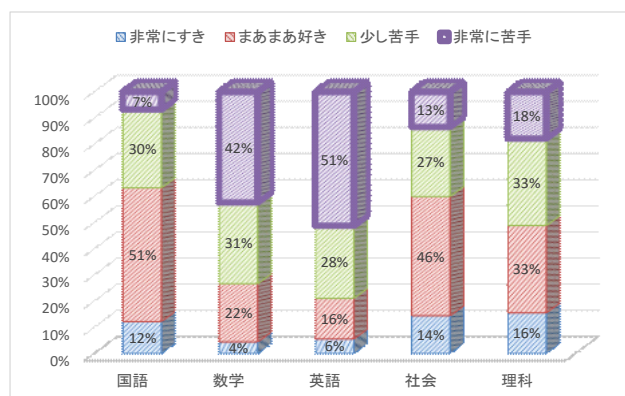
基礎的・基本的な学力や基本的生活習慣の定着に加え、人との関わりにおいて課題を抱える生徒が本校に入学してくる。そのため、例年、入学当初にさまざまな問題が生じている。

本校の進路状況については、就職と進学が約半数ずつ、もしくは就職がやや多い状況が近年続いている。進学については、資格取得をめざした専門学校への進学が例年進学者の半数以上に相当し、入試方法はAO入試や推薦入試による受験が約80%を占めている。就職・進学の両方において、面接試験で自らの意見を求められる生徒が多いものの、語彙や経験の不足から自己表現を正しくできる生徒が少なくなっている。

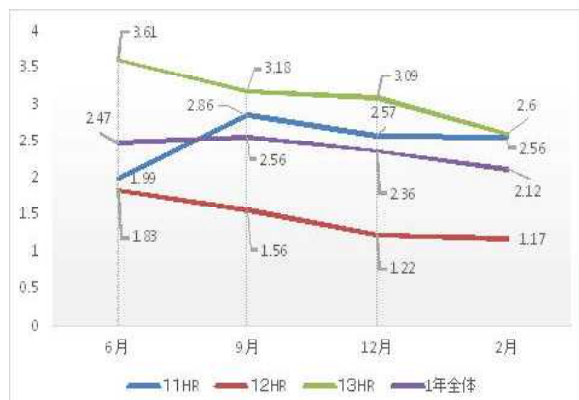
さらに（表1：H26年度入学生）に見られるように、本校に入学してくる生徒は教科に対する苦手意識が強い傾向もある。この状況に対応するために、「習熟度別授業」・「少人数制授業」・単位制による進路に応じた個別カリキュラム編成を行っている。また、「発達と保育」「すぐ使える法律学」「楽しい実験」など実用的な学校設定科目も設けている。

しかし、さまざまな意欲が低下している生徒にとって、定期考査前家庭学習時間調査（表2：H26年度入学生）からもわかるように、現状の取り組みだけでは社会に出て学び続ける意欲をもつ生徒の育成にはほど遠い。生きた「学力」、つまり決して時代の変化があろうと朽ちない、社会生活で必要となる力が身につけているとは言いがたい。本校がめざす「社会生活を円滑に過ごせる生徒」の育成、なかでも「自分の考えを持ち、相手によりよく伝えられる生徒」を育成して社会に送り出すために、どのようにすればよいのかという課題を本校は抱えている。

(表 1)



(表 2)



3 研究課題

平成27年度における本校の取り組みとして、昨年度同様、生徒に「出番」や役割を提供することで、生徒の自己「評価」の向上を図り、「自信」をつけることをめざす。特に1・2学年の生徒を対象とし、①教員の授業力向上と教育評価の改善、②中学校との連携、③地域との連携の3点に重点を置く。

4 平成27年度の重点課題

①教員の授業力向上と評価方法の改善

先進校への訪問と、アクティブラーニング・教育評価の研修会を実施することで、授業における生徒の「出番」、つまり生徒の主体的な活動の場面を増やす。

②中学校との連携について

アクティブラーニング・教育評価の校内研修会に近隣中学校からの参加者を募る。また、中学校の先生方に本校教員の授業参観を依頼し、意見交流の機会を設ける。

③地域との連携について

ボランティアなどにより、地域の異年齢の方との関わりを増やす。今年度は新たに「絵本の読み聞かせ」を近隣小学校・子供会にて実施し、小学生や地域ボランティアの方とのふれあいから人に必要とされる喜びの経験を増やす。

5 研究の具体的内容（検証の手立てを含んでもよい）

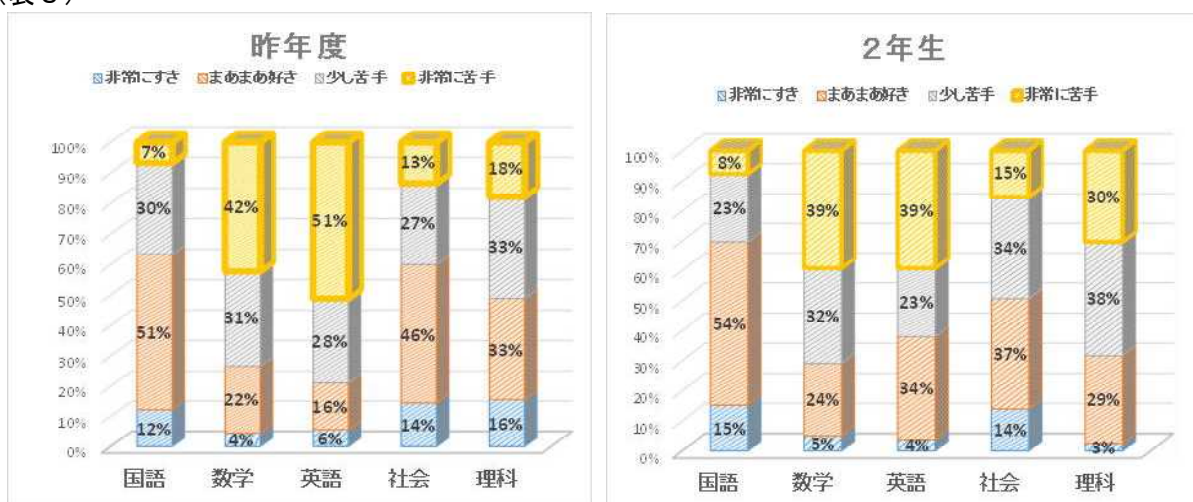
	昨年度の継続内容	今年度の新規内容
4月	マナトレ国語（ベネッセ）, 基礎編（1年） 標準編（2・3年）を年間計画のもと活用	・月1回「穴高読書の日」
5月	1学期中間考査：学習時間調査 自己評価アンケート	・担当者連絡会（県教育委員会） ・教育評価研修会（鳴門教育大学：前田教授）
6月	公開授業週間	・「絵本の読み聞かせ」講習会（1年生） ・小学校の先生による授業参観（公開授業） ・連携校での運営指導委員会（板野・小松島）
7月	1学期期末考査：学習時間調査 自己評価アンケート	・アクティブラーニングの校内研修会 （日本青少年育成協会：小山先生） ・「絵本の読み聞かせ」ボランティア
8月		・「授業改革」に関する校外研修（数学）

9月		<ul style="list-style-type: none"> ・公開授業・運営指導委員会(県教育委員会) ・先進校への訪問(奈良県立桜井高校：英語)
10月	公開授業週間 2学期中間考査：学習時間調査 自己評価アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・「絵本の読み聞かせ」ボランティア
12月	2学期期末考査：学習時間調査 自己評価アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・学校訪問（文部科学省） ・高大接続情報交換会で実践報告 ・「徳島ウィンターキャンプ」で授業力研修 ・「あわ（OUR）教育発表会」で実践報告 ・「絵本の読み聞かせ」ボランティア
2月	自己評価アンケート	<ul style="list-style-type: none"> ・言語活動の充実に関する実践研究校の公開授業・運営指導委員会に参加（川島高校） ・連絡協議会（文部科学省）

6 研究の成果

現在2年生の生徒に「教科に対する苦手意識アンケート」を実施し、H26年度入学時とH27年度2年生進級時に行ったものを比較したところ（表3）、黄色で強調している「非常に苦手」と答えた生徒の数が、昨年度よりも今年度の方が数学・英語で減少していることがわかった。

（表3）



また、「教科に関する理解度についてのアンケート」を実施したところ、H26年度1年次のデータよりもH27年度2年生進級後のデータのほうが、黄緑の点線部「授業をわかりにくい」と答えた生徒が減少し、特に苦手意識の強かった数学・英語でその傾向が顕著であることがわかった。（表4）

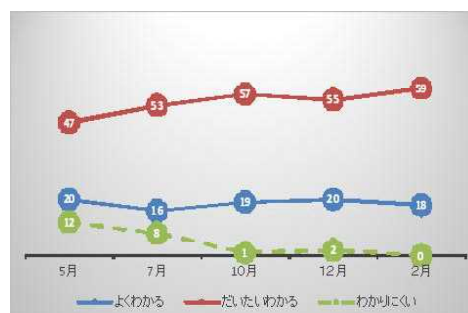
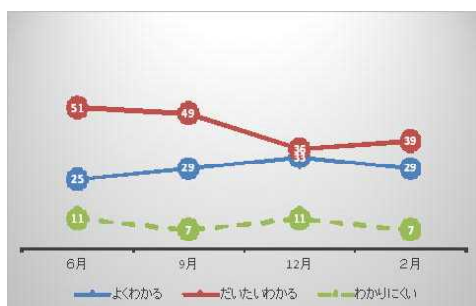
今年度入学生についても、「授業をわかりにくい」とする生徒が入学時より減少している。（表5）

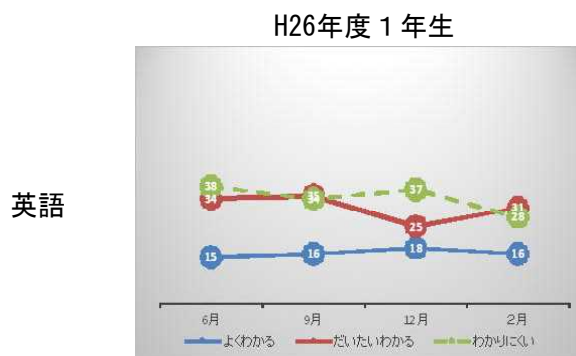
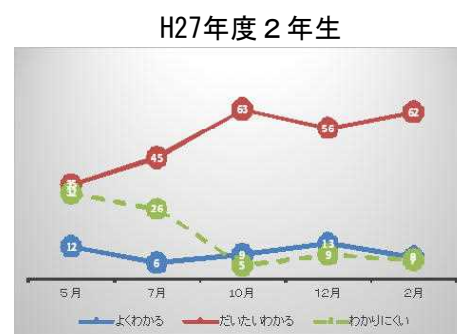
（表4）

H26年度1年生

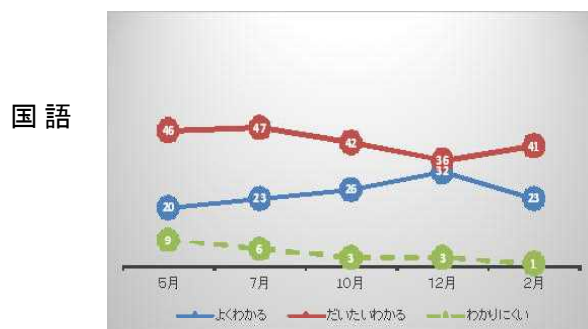
H27年度2年生

国語

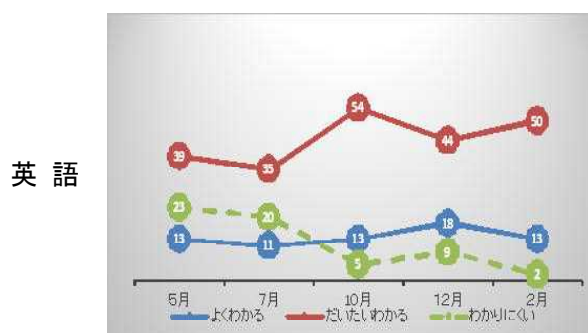
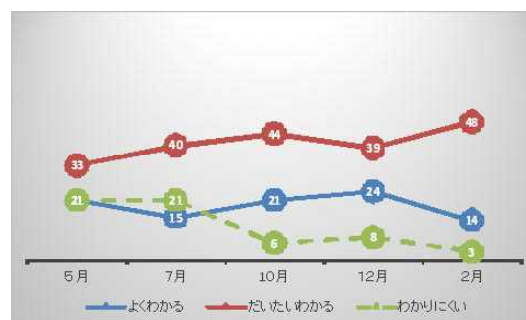




(表 5) H27年度入学生



数学



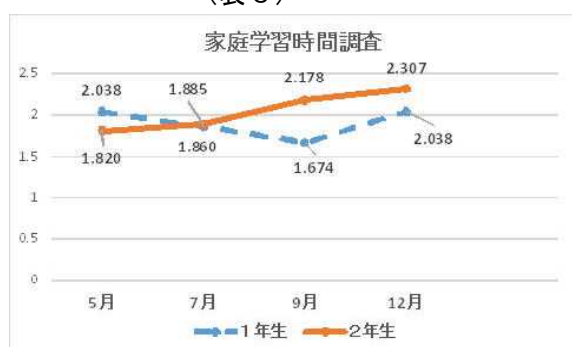
今年度7月から10月にかけて「授業をわかりにくい」とする生徒が大きく減少した(表4・5)要因として、5月に実施した「教育評価」の校内研修会、7月に実施した「アクティブラーニング」の校内研修会、8月に「授業改革」に関するフォーラムで数学科、9月に奈良県立桜井高等学校で英語科が研修したことが影響しているように思われる。

達成可能な授業目標を授業最初に明示することで、生徒が自ら何を学んでいるのかを理解できる工夫をすること、教育コーチングの手法による教員の声かけ・仲間同士の言葉がけによる他者評価、授業後の振り返りシートによる自己評価、ホワイトボードやICTを使った授業内容の視覚化、ペアワークやグループ活動による人との温かい関わりなど、研修で学んだことを授業の中で実践した。

こうした研修による実践が、次の内容にも影響しているように思われる。本校では「学力向上実行プラン」について、昨年度まで小テストの優秀者や資格検定の合格率、課題提出率を指標としていた。しかし、今年度は国語・数学・英語の3教科において、授業を「頑張っている」「まあまあ頑張っている」と答える生徒の割合に変え、教職員の授業に対する意識改善、つまり生徒にとって有効な授業づくりを意識できるよう工夫した。その結果、1年生は国語94.4%・数学91.5%・英語94.4%、2年生は国語98.7%、数学97.4%・英語98.7%となり、1年生は93.8%、2年生は98.9%の生徒が、授業を「頑張っている」「まあまあ頑張っている」と自己評価できている。定期考査中に実施した生徒の家庭学習時間についても、やや緩やかではあるもののH27年度4月当初よりも増えているのがわかる（表6）。また年間2回実施している公開授業週間の教員アンケートで、「生徒の主体的な活動の場面」が授業にあると答えた数値が、67%（6月）から87%（10月）に増えていることがわかり、生徒の「出番」を授業の中でつくり出すことができていると実感した。6月の公開授業週間中に来校された小学校の先生からは、「小学校の学習内容との継続性を感じた。実態に即した丁寧な指導・学び合いがあり、温かい授業であった。」と、コメントをいただいた。

保護者に、本校の教育活動について「自立した生徒を育成するのに充実しているか」というアンケートを実施したところ、「充実している」16.9%・「まあまあ充実している」66.9%と答えている。生徒の「出番」を意識した教育実践による効果、生徒の自己評価・教職員のアンケートからわかる変化の兆しを、保護者や地域の方・近隣の小中学校にも御理解いただける内容に発展させる必要性を感じた。

（表6）



（写真1）



また、中学校との連携については、徳島県教育委員会主催で9月9日に本校にて公開授業・運営指導委員会を行った。近隣の中学校より10名の先生方が御参加くださった。その際、中学校の先生から「今後、生徒の自己肯定感を高める声かけや、やればできるを実感できる授業を、小学校とも連携を取りながら工夫していきたい」という心強いお言葉をいただいた。また、中学時代に気になっていた生徒の成長した姿を公開授業で見ることができたという、うれしいお言葉もいただけた。

さらに地域との連携として「絵本の読み聞かせ」ボランティアを、近隣小学校や子供会で3回行った。（写真1）のように、小学生の笑顔と積極的な参加によって、参加した本校の生徒も自然と笑顔になれた。子どもたちに喜んでもらえたことが、次回実施の原動力となり、もっとうまく読めるようになりたいという意欲につながっていた。

7 今後の課題

「社会生活を円滑に過ごせる生徒」の育成、なかでも「自分の考えを持ち、相手によりよく伝えられる生徒」を育成することを本校の教育目標としているのは、先述の通りである。生徒が授業のなかで「出番」を得ることは、生徒の主体的な活動を作ることとなり、授業を「わかる」「頑張っている」と生徒が実感することにもつながっていることが、2年間の実践によって見受けられた。

今後、授業が「わかる」を「できる」に発展するにはどうすればよいか。その実現がなければ、本校がめざす「社会生活を円滑に過ごせる生徒」の育成には、ほど遠い。今年度、文部科学省より御訪問くださった大滝調査官より御指導いただいた「学びの意義」、つまり、「こういうことを知っていると社会や仕事で役立つ」といった具体的な場面を意識した学びをいかに実践するか。その実現のために、小・中学校や地域との連携において、さらなる充実を図ることが課題だと感じている。2月に行われた連絡協議会でのお話にあったように、「教材を」教えるのではなく「教材で」生徒にどのような力をつけることをめざしていくのか。形式的な学びに終わらせることなく、生徒が学んだことを自分自身のこと、自分の生き方、そして社会へとつなげられるように、授業同様、本校の課題・目標についても明確にして取り組みたい。

本校の卒業生である、アテネオリンピック金メダリスト柴田亜衣さんが、本校の創立90周年記念講演で、「あわてず・あせらず・あきらめず」というメッセージをくださった。教師が意欲をもって「あわてず・あせらず・あきらめず」に取り組む姿勢を、生徒や地域・保護者に発信することによって、生徒の意欲を喚起し、授業が「わかる」から「できる」に発展できるようにする。そのために、保護者や地域の方の刺激となり、教師の意欲を高められる研修・出張の機会を考案し、生徒・教職員が「やらされる」ではなく、「やりたい」と思える内容を提供したい。



【教育評価研修会】



【アクティブ・ラーニング研修会】



【公開授業】



【運営指導委員会】

(様式 7)

平成 27 年度「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における
「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究（高等学校）」
委託業務報告書【推進校（徳島県立小松島高等学校）】

番号	36	都道府県市名	徳島県
----	----	--------	-----

1 学校の概要

＜生徒数・学級数(平成27年4月現在)＞

学校名	徳島県立小松島高等学校（とくしまけんりつこまつしまこうとうがっこう）				
学 年	1 年	2 年	3 年	計	教員数
学級数	6	6	6	1 8	4 0
生徒数	2 1 4	2 2 7	2 1 5	6 5 6	
	学校のホームページアドレス		http://komatsushima-hs.tokushima-ec.ed.jp/		

2 推進校における学力に関する現状

本校は、小松島市内唯一の普通科高校であり、小松島市内の生徒が進学する中核校としてこれまで優秀な人材を育成してきた伝統がある。しかし、交通の便がよいことや高校入試制度の変革、定員の変化等により、地元中学生の上位層が、隣接する徳島市や阿南市の進学校に流出し、逆にそれらの地域から流入する生徒が半数以上を占めるようになっている。入学する生徒の学力層も中位層から下位層の生徒が中心を占めるようになり、学力層の幅がいつそう拡大している。

また、卒業生の進路も就職希望が増え、入学当初から就職2割、大学4割、専門学校4割と、かつての進学中心ではなく、多様な進路希望に対応しなければならない状況である。

生徒の気質は、温厚で明るく生活態度もおおむね真面目で落ち着いている。入学時の意識調査では勉強も部活も両立させたいという生徒が多く、部活動やボランティア活動に熱心である。しかし、学習不安は大きく、生活実態調査でも学習習慣が確立されておらず、スマホやTVを見て過ごす時間が長いという結果になっている。

3 研究課題

- ①多様な学力層の生徒について、個に応じて学力を伸ばし、多様な進路を実現させるために、1年生の段階で中学校での学習の学び直しをしつつ基礎学力の定着を図ることで、生徒に自信を取り戻させること。
- ②生徒との効果的かつ頻繁な面談を通して、早期から進路意識を喚起するとともに、自ら学ぶ意欲を醸成し、学習習慣に繋げること。また、教員の授業力向上を図るために効果的な研修を行い、実践に生かすこと。
- ③地元中学校との教育交流を教員・生徒ともに一層推進し、互いに意見や情報を交換する機会を持つなど、相互理解を深めること。

4 平成27年度の重点課題

①「松高セミナー」等をより効果的なものとなるように見直す

- ・国語も含め、数学・英語においてもより効果的なセミナー内容を検討する。
- ・その他の本校のこれまでの取組「週末課題」や放課後補習等についても、生徒の実態に即した効果的な改善に取り組む。
- ・上記の見直しにおいて、つきたい力は何なのか、目標と方向性を明確にすること、どうすれば生徒の主体的な学習意欲を喚起し、それを持続させられるのか、その方策と効果の検証方法を考えて実行する必要がある。

②教員の授業力向上と面談のスキルアップを図る

- ・従来から行っている「授業研究週間」のより効果的な実施方法を検討し、教員が自らのステップアップを図る年と位置づけたい。
- ・面談の機会を増やし、生徒理解に基づく進路意識の高揚と学習意欲の喚起に繋げたい。

③地元中学校との教育交流を行い、ともに地元生を育てる気運を高める

- ・地元中学校と、より様々な場面で教育的交流を活発にしたい。教員のみならず生徒の交流もすすめることによって、地元中学生が行きたい魅力ある高校を目指す。
- ・本校の取組と成果をホームページ等で公開し、広報活動にも力を入れていく。

5 研究の具体的内容

4月 第1回面談月間実施

4月9日（木）から4月24日（金）まで、面談を行った。生徒一人に対し30分程度の面談時間を確保することができ、生徒理解につながった。2, 3年生には進級後の意識づけを行い、個人にあった学習方法や進路に対する各自の思いを聞き取ることができた。

5月 「ホワイトボード・ミーティング」研修を受講する。

日時 5月15日（金）13:00～16:00

演題 「ミニホワイトボードを使った授業のすすめ方」

講師 河北純子 様（株式会社ひとまち ファシリテーター養成師）

- 内容
- ①自由に発言できるクラスの雰囲気づくりにホワイトボードを活用
 - ②オーブンクエスチョン（質問の技カード）で相手に話させる
 - ③発散（テーマに沿って情報を広げ、深める）→収束（軸を決めて構造化する）
→活用（具体的な結論）

参加 地元中学校にも案内し、3名の参加があった。



結果 参加者合計40名。アンケート回答者のうち73%が大変良いと答え、好評であった。

感想抜粋（発問の仕方の大切さを改めて考えさせられた。クラスで即、活用できることをたくさん学べた。ぜひ活かしていきたい。ファシリテーターの入口を体験できて良かった。練習を重ねて自分のものにしていきたい。授業でも面談でもホワイトボードを取り入れたい。会議でも意見を深めることに活用したい。コミュニケーションの取り方や仲間づくりには大変効果的だと思う。フラッシュカード的な使い方も参考になった。口に出して自分の意見が言えない生徒もいるので、ホワイトボードを使用して意見を引き出したいと思った。面談に大変有効だと感じた。意見を可視化することで相談者にとっても、受け取る側にとっても方向性が分かりやすくなり良い解決につながると感じた。）

5月25日（月）から6月12日（金）第1回校内授業研究週間

授業を教員間で互いに授業を参観し、意見交換を行う。参観した授業のコメントカードを研修係に提出し、研修係が授業者に配布する。教科間を越えて参観が実施された。

6月 「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」公開授業及び運営指導委員会

日 時 6月24日（水）公開授業 13:30～14:20

委員会 14:40～15:30

場 所 徳島県立小松島高等学校（本校）

公開授業 1・2年生全クラス公開（12クラス）

参 加 他の高校や地元中学校にも案内し、中学校5名・高校18名の参加があった。

感想抜粋（先生・生徒の普段からの信頼関係の構築がよく見えた。生徒の積極的な活動に感心した。班活動では生徒の表情がとても和やかでした。ホワイトボードを生徒が上手く活用できていた。生徒が主体的に取り組めるように授業がよく工夫されていた。生徒がよく発表しペアワークも生き生きと行っていた。日頃から指導されているからこそと感じた。国語の授業ではICTを積極的に利用し生徒の意欲関心を上手く引き出していた。授業の振り返りを個人でワークシートに記入させた後ペアで話し合っていた。相手に伝えることで授業の内容がより定着しやすくなる良い工夫だと思った。）

第1回運営指導委員会での教示

・学校の使命は「生涯にわたって学習する基盤づくり」である。学習者としての自信を与え、学ぶことがいい経験だと理解させ、学ぶ方法を教えなければならない。そのためには、教員全員がチームとして機能することが必要である。

・どういう指導、フィードバック、声かけ、評価が生徒の自信を高めて行くかを考えなければならない。

・どのような力をつけさせたいのかということを明確にし、生徒目標をしっかりと定めさせてフィードバックさせていく必要がある。

6月25日（木）徳島県立板野高等学校 公開授業及び運営指導委員会

本校から2名参加し、公開授業を参観・運営指導委員会に参加した。

7月8日（水）徳島県立穴吹高等学校にて「アクティブラーニング」研修を受講する。

演題 「Active Learning 基礎研修」

講師 小山秀樹 氏（日本青少年育成協会マスター教育コーチ）

内容 ALを体験し「私のAL授業」のヒントを得る。協同学習の技法と振り返りを通して、ALとは何かを理解する。

本校から2名参加し、研修を受講した。具体的なALの方法を体験することができ大変参考になった。

7月17日（金）～8月11日（火）三者面談を実施。

9月9日（水）徳島県立穴吹高等学校 公開授業及び運営指導委員会

本校から2名参加し、公開授業を参観・運営指導委員会に参加した。

9月 第2回面談月間実施

9月10日（木）から10月2日（金）まで、1・2年生の放課後補習を中止し個人面談を行った。夏季休業からの生活や意識の切り替えや、学習の動機づけにつながった。1年生では、コース選択について生徒の思いを聞き取ることができ、進路に対して真剣に考える良い機会となった。

9月24日（木）上勝中学校にて「ホワイトボード・ミーティング」研修を受講する。

演題 「心の活力を高め、豊かな生き方を育む道德教育」

～ホワイトボードミーティングの活用で話し合う力を高めよう～

講師 ちょん せいこ さん（株式会社ひとまち 代表取締役）

内容 上勝中学校体育祭（上勝町町民運動会）を振り返り、体験から得たことや次年度への改善点を全校生徒がホワイトボードを使い話し合い考えを深める。

本校から2名参加し、研修に参加した。生徒達がホワイトボードを使い、グループで思考を深めていく様子を見ながら授業のポイントを知ることができた。

10月 「アクティブラーニング」研修を受講する。

日時 10月16日（金）13：30～16：30

演題 「アクティブラーニングによる授業実践」

講師 増田 乃美 様（日本青少年育成協会教育コーチ）

内容 ①アクティブラーニングとは。なぜアクティブラーニングなのか。

②模擬授業「国語」・「生物」 ③アクティブラーニングの実践例紹介

参加 地元中学校にも案内し、5名の参加があった。

結果 参加者合計39名。アンケート回答者のうち大変良いが60％・良いが34％・普通が2.8％・少し物足りないが2.8％であった。

感想抜粋 （アクティブラーニングに対する像がはっきりした。学習の活動がアクティブラーニングであることを知り、見方が少し変わった気がした。自分では正しいと思っけていてもグループで話し合うことで間違いが分かったり、より正しい解答へ導くことができた。具体的な教材の提示をしてくれた点良かった。リフレクションシートの活用が効果があるということがよく分かった。体験してみて、いろいろな角度からの多角的な視点で授業が構成されていることに気づき、アクティブラーニング型の授業でもここまで深めることができると分かった。）

事後 研修の最後に「リフレクション&アクション」カードを記入した。このカードの内容をまとめ、学んだことやこれからやろうと思ったことを共有した後、教科会で話し合った。



10月31日（土） 地元、小松島中学校のオープンスクール

- 本校から7名参加し、公開授業を参観・講演会に参加した。
- 11月4日（水）から11月17日（火）第2回校内授業研究週間
授業を教員間で互いに参観し、意見交換を行う。また、アクティブラーニングの実践例を各自修係に提出し、各教科の実践例をまとめ共有した。
- 11月4日 本校のオープンスクール
地元の中学校から3名の参加があった。
本校の公開授業や人権講演会に参加していただいた。
- 11月19日（木） 地元、小松島中学校第2学年つどい学習
内容 職場体験学習での体験をまとめた発表会と意見交換。
本校から1名参加し、つどい学習を参観した。
- 11月30日（月） 「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」研究・公開授業及び協議会
文部科学省初等中等教育局国語教科調査官 大滝一登氏が来校し、本校1年生の英語の授業見学と、国語の研究授業を参観し、目指すべき方向について御教示いただいた。
参加 他の高校にも案内し、20名の参加があった。
・目標に明確に立て、目標に適した深い学び自主的な学びを実践しなければならない。
・アクティブラーニングをふまえた授業改善に向けて更に取り組む必要がある。
・学力向上としては学校全体で、どのような学びを身につけ社会に出したいのかという共通認識を明確に持つ必要がある。
・学力向上を行うためには「授業」が核になる。カリキュラムマネジメントをしっかりと行う必要がある。
- 12月 「第13回高大連携教育フォーラム」 京都高大連携研究協議会主催 に参加
日時 12月4日（金）9：30～17：15
テーマ 「アクティブラーニングへの模索」～「教える」と「学ぶ」とのリンクを考える～
場所 キャンパスプラザ京都（京都市下京区西洞院塩小路）
内容 ①特別講演「教える」から「学ぶ」への転換 講師 土持ゲーリー法一氏（帝京大学高等教育開発センター長） ②実践事例紹介（高校）（大学）③ディスカッション
本校から2名参加し、講演会・実践事例紹介・ディスカッションに参加した。様々なアクティブラーニングの具体的な実践事例を知ることができ、他校の教員と取り組みについてディスカッションできたことが大変勉強になった。
- 12月24日（木） 平成27年度あわ（OUR）教育発表会における発表と参加
発表 「確かな学力の育成に係る実践的調査研究」推進校3校（穴吹高校・板野高校・本校）による取り組みの成果について合同発表を行った。
他校の教育実践についての発表を聞く中で、県立川島中学校・高等学校で実施しているアクティブラーニングの実践報告は、本校にとって大変参考になった。
参加 本校からは3名が参加した。
- 1月 第3回面談月間
1月13日（水）から1月29日（金）まで、1・2年生の放課後補習を中止し面談を行った。3学期という1年の締めくくりの学期をどう過ごすのか、また生徒一人一人の課題に寄り添い面談を行うことができた。学期ごとに面談月間を今年度から導入したが、生徒・教員ともに大変好評であった。教員と一対一ならば自分の思いを素直に述べることができる生徒が多く、面談を通じて、問題解決の糸口をつかめたり自己の進路について意識を高めることができた。
- 2月5日（金） 地元、小松島中学校第1学年つどい学習

テーマ 「みんな大切な命」～心を育て、よりよい集団を築こう～

本校から3名参加し、つどい学習を参観した。

2月 平成27年度「言語活動の充実に関する実践研究」公開授業及び実践協議会への参加

日時 2月8日（金） 13:30～17:00

場所 徳島県立川島中学校・高等学校

本校から4名参加し、公開授業を参観・実践協議会に参加した。

2月17日（水） 平成27年度「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する実践研究」連絡協議会

内容 事例発表（小・中・高）、質疑応答、指導助言。学校種別分科会（高等学校）事例発表。

本校から1名参加。実践研究の取り組みや指導助言を聞き、本校での取り組みを更に充実させるためには生徒の実態をより細かく把握し、PDCAサイクル充実に向けての一層の推進が必要であると感じた。

6 研究の成果

①「松高セミナー」等をより効果的なものとなるように見直すことについて

国語においては、Benesseのマナトレ中級編を松高セミナーで毎時間実施した。生徒達は15分間集中し学習に取り組み、残り10分で答え合わせと間違えた箇所を再度練習した。継続して行いテキストは2回通り実施したため基礎学力を高めることができた。セミナー期間終了後に授業を使いまとめテスト（Benesse作成、採点）を行った結果、全員が4級に合格することができた。認定書を貰うことで自信にもつながった。また、授業においては、生徒同士の話し合いの場を必ず設けるなど言語活動の充実にも努めた。週末課題は授業の復習や予習プリントだけではなく新聞のコラムの書写を行った。その結果、年間2回実施しているスタディサポート（4月・9月実施 Benesse）では、1年生で4月から9月にはD層が4名ではあるが減り、2年生では4月から9月には12名減少した。また、B層も4月から9月には7名増加した。数学においては、松高セミナーでパワトレ（Benesse）を使用し何度も反復させた。週末課題では、自主的な学習を促すため、プリント課題を減らし復習ノートや予習ノートを生徒が作成するようにした。授業では協同学習をホワイトボードやワークシートを使用し行った。その結果スタディサポートのB層が1・2年生共に増加している。英語においては、教科書の副教材を用いて、授業とリンクさせた松高セミナーを行った。また、授業ではペア学習やグループ活動を通して、積極的に授業に参加する姿勢を培った。その結果スタディサポートでは、1年生ではD層に変化は見られなかったが、B層が7名増加した。また、2年生では4月から9月にはD層が29名も減少し、B層も微増している。

②教員の授業力向上と面談のスキルアップを図ることについて

「ホワイトボード・ミーティング」では、多くの教員が受けて良かったと実感し、授業や生徒との面談において研修で学んだことを意識しながら取り入れている。また「アクティブラーニングによる授業実践」では、効果的な実践方法や具体的は方法を学ぶことができ、研修は大変好評であった。授業ですでにアクティブラーニングを行っていた教員も、リフレクションシートを工夫したり、この研修後取組を始めた教員も多数いた。11月に行った教員アンケートでは90%がアクティブラーニングを実施していると答えた。実践方法について教科別にまとめた資料を作成し共有することもできた。生徒が本当に主体的に活動できているのか分からないという声や評価の方法を従来から変える必要があるのではないかという声もあったので、今後も研修と実践を重ねていく必要がある。さらに組織的・計画的な取組ができるように全校職員で取り組む体制を作る必要がある。面談月間は、大変好評であった。教員に実施したアンケートでは、98%が面談月間を有効に活用できたと答え、96%が次年度も面談月間を継続すべきと答えた。生徒達も、従来の10分間程度の面

談時間では自分の思いを十分に語るができなかったが、今年度は30分の面談時間があったため、普段言えないようなことを言うことができ、先生からも普段あまり聞けない事も聞けたので、先生の思いも伝わったという声が多数あった。ただ、放課後の補習が減ったため十分な指導ができなかったという声も聞かれた。本校では、補習も生徒にとっては貴重な学習時間であるため、面談月間の継続には実施の方法を考慮する必要がある。

【授業評価の変化について（生徒学校評価アンケートより）】

・（Ａ）授業の内容をよく理解できていますか。

実施年度	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
平成25年度	28%	50%	19%	3%
平成26年度	23%	54%	19%	4%
平成27年度	28%	53%	15%	3%

・（Ｂ）学力が身に付いてきていると思いますか。

実施年度	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
平成25年度	26%	45%	24%	5%
平成26年度	18%	46%	30%	7%
平成27年度	22%	47%	26%	5%

・（Ｃ）先生の指導は分かりやすく丁寧にできていますか。

実施年度	そう思う	どちらかと言えばそう思う	どちらかと言えばそう思わない	そう思わない
平成25年度	44%	44%	10%	3%
平成26年度	41%	46%	9%	4%
平成27年度	53%	38%	7%	2%

アンケート結果から（Ａ）では大きな変化は見られなかった。しかし（Ｃ）で、そう思うと答えた生徒が増加しているのは、教員の授業改善に取り組んだ効果が見え始めているものだと考えられる。また（Ｂ）で、そう思うが減少したのは協同学習やアクティブラーニングを行うことで、授業は活動的で分かりやすくなったと感じているが、それで学力が身に付いたとは感じていない者がいるためだと思われる。リフレクションシートの活用方法や、授業を家庭学習へどうつなげていくか工夫していく必要がある。

③地元中学校との教育交流を行い、ともに地元生を育てる気運を高めることについて

昨年度から部活動以外の場面での地元中学校との交流を開始した。今年度は、本校で実施した研修会や公開授業に参加していただいたり、本校教員が中学校のつどい学習に参加するなどし、相互理解がさらに深まった。しかし、本校の取り組みについて広報に力をいれていくという課題は十分に実施することができなかった。ホームページの充実や本校の魅力を中学生にアピールする機会を増やす必要がある。

7 今後の課題

①「松高セミナー」等をより効果的なものとなるように見直すことについて

- ・国語・数学・英語において生徒の実態に対応したより効果的なセミナー内容を検討し、どうすれば生徒の主体的な学習意欲が喚起し、継続することができるのか、実施の方法を検討する必要がある。
- ・各教科においてつけたい力は何なのか、目標と方向性を明確にする必要がある。

②教員の授業力向上と面談のスキルアップを図ることについて

- ・アクティブラーニングの効果的な実践方法と評価の方法の研究を実施し効果の検証方法を考えて実行する必要がある。
 - ・「授業研究週間」のより効果的な実施方法を検討し、教員のさらなるステップアップを図りたい。
 - ・面談月間は生徒にも教員にも好評であった。しかし、年3回の面談月間を実施することにより、補習時間が大幅に削減された。減少した補習時間の確保と3年生に向けての意識づけのために本年度より、2年生の2月に3年生から始める希望生制の早朝補習を先行した。生徒には大変好評であり申込者は全体の91%であった。生徒がいかに学校での取り組みに期待しているかが分かった。放課後補習は生徒にとっては貴重な学習時間であるため、面談月間の実施の方法を工夫し補習時間を確保する必要がある。
 - ・今年度よりさらに組織的、計画的な取り組みができるよう全校職員で取り組む体制を作る必要がある。
- ③地元中学校との教育交流を行い、ともに地元生を育てる気運を高めることについて
- ・今後は今年度の成果を生かして、さらに様々な場面で教育的交流を活発にしたい。教員の交流とともに生徒の交流もすすめることによって、地元中学生が行きたい高校、魅力ある高校となるように①や②の実践を充実させていきたい。
 - ・本校の取組と成果をホームページ等で公開し、広報にも力を入れていく必要がある。

【授業実践の様子】

